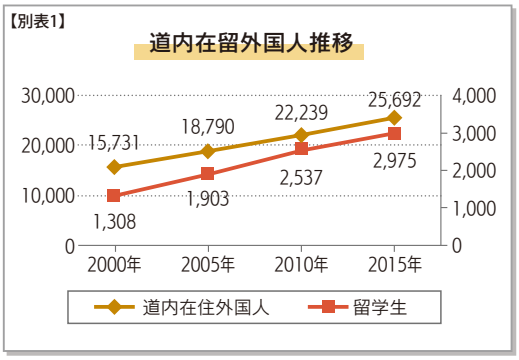
北海道の国際協力情報紙
であい
vol.78 2016 SUMMER
公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

特集

「道内の外国人受入れ状況とハイエックの多文化共生事業」

北海道の在留外国人数は、2000年に1万5千人余りであったが、2015年には約1万人増加し2万5千人を超えている。このうち道内の大学に在籍する留学生も15年で約1,600人増加している状況。(別表1参照)

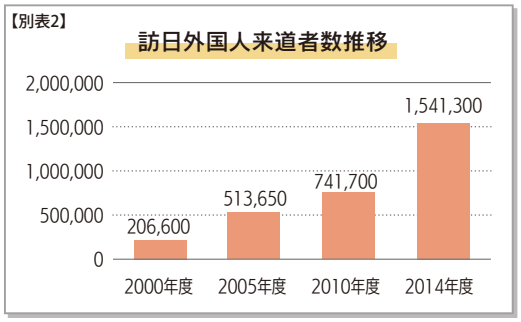
【別表1】



北海道民全体に対する在留外国人の割合は0.4%と低いものの、地域ごとに見ると10%前後となる自治体も散見されるようになってきている。また、在留資格別に内訳をみると登録数上位から、北海道の農業や水産加工などへの従事を目的とした技能実習が(1号イ・ロ及び2号イ・ロの合計)4,765人、永住者が4,665人、特別永住者が3,379人と続き、技能実習生が在留外国人全体の5分の1を占めているのは、北海道の特徴である。(平成27年版「在留外国人統計」より) 全国的な傾向として、特別永住者は年々高齢化が進み減少傾向にあるが、日本に10年以上滞在し資格を得た永住者は、増加の一途を辿っている。道内では、地域に在住する外国人が、労働者として地域経済の一部を支えるなど、地域になくてはならない存在となってきている現状がある。

一方、短期滞在者である訪日外国人観光客数の推移を見ると、2000年度に約20万人程度だった来道外国人観光客は、北海道が非常に人気を博してきていることもあり、2014年度にその7倍強の154万人を超え急増し、アジアを中心とした国々から多数来道している。(別表2参照)道内都市部のみならず各観光地等において、多様な文化的背景を持つ外国人が来道し、様々な国の言葉が飛び交うなど、本道のグローバル化も顕著となってきている様子がうかがえる。

【別表2】



これまで、中長期に在住する外国人と観光客の様に一時的に滞在する外国人への対応は、別のものとして考えられてきたが、通信技術の向上やLCC(格安航空会社)の普及により、団体旅行もさることながら、個人のニーズのもと来道する外国人観光客も増えてきており、目的地や日程なども多様化し滞在も長期化してきているなどのことから、在住外国人と外国人観光客への対応については、重なり合う部分が生じてきている。

ハイエックでは、本道において、外国人居住者が地域を構成する一員となってきていることに加え、来道外国人観光客も急増していることから、道民も外国人もともに互いの文化や言葉、生活習慣を正しく理解・尊重し合うことができる多文化共生社会の実現を目的に、本誌でも度々紹介しているとおり講演会や事業担当者を対象とした研修会などの多文化共生事業を実施している。また、道内の自治体、国際交流団体や市民団体等が抱える在住外国人に関する諸課題をともに検討し解決することを目指すとともに、顔の見えるつながり(ネットワーク)を形成のうえ、相互に多様な担い手が連携し北海道全体における多文化共生の地域づくりの推進を目的に(公財)札幌国際プラザと共催して「多文化共生ワークショップ」を開催している。

このワークショップでは、現在も喫緊の課題となっている災害時における外国人への対応などについて、阪神・淡路大震災、東日本大震災などを経験し外国人のサポートを経験した団体、全国各地で多文化共生を啓発している団体などから講師を招き講演を行ったり、参加者が模擬的に体験できる「災害図上訓練(DIG(ディグ))」などを実施したりするとともに、外国人支援に関する情報や意見交換などを行ってきた。

今年2月に旭川市で本ワークショップを開催した。試作段階にあった北海道で起こりうる事象を想定した「避難所運営ゲーム(HUG(ハグ))北海道版」を北海道大学大学院工学研究院の森太郎准教授の指導のもと体験した。今回は、冬季に巨大地震が発生、外は積雪50センチ、明朝は氷点下−12℃などを想定。参加者は、次々と非難してくる避難者(カード)を、避難所(机上平面図)のどこに配置していくかを瞬時に話し合い判断しなければならない。外国人参加者は、「避難所での意思疎通には、言葉の問題がとても大きい」と指摘した。

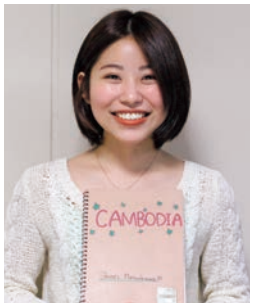
HUGに取組む参加者

2015年全国の在留外国人数は過去最高の223万2189人、そして、訪日外国人観光客数は同じく過去最高の1973万7400人(推計値)となった。北海道も同様、それぞれ過去最高の数値を記録するなど、今後、益々外国人が北海道を訪問するとともに、また、在住する外国人の増加が予想される。ハイエックでは、引続き、自治体や道内各地域で活動する国際交流等の団体とのネットワークや連携を強化しながら、北海道全体の多文化共生を推し進めることとしている。

アジアの架け橋参加者
INTERVIEW
第２回

高校生・アジアの架け橋養成事業に参加して

その後



氏名　松川　栞 さん

平成26年度
「高校生・アジアの架け橋養成事業」
参加（カンボジア派遣）

道内の私立大学の社会福祉学部に4月から通う松川さん。社会福祉の道を選んだのは、2年前に同事業へ参加しカンボジアへ行ったことが大きく関わっている。

「世界に目を向けるようになったきっかけは?」

――小さい頃の習い事で英会話を始め、欧米諸国や英語への憧れから海外に興味を持つように。しかし、高校1年生は思い描いたような学校生活にならず、「何かを変えたい」とこの事業へ応募。「実は、“カンボジア”という国名もアジアにあることさえもよくわからず、研修前に初めてインターネットで検索しました」と申し訳なさそうに話す。さらに、“現地に行く”ことばかりに気を取られ、事後や報告会に向けての心の準備もできず、最初は「間違えたかも…」と感じていたそう。

「『高校生 ・ アジアの架け橋養成事業』に参加して、どうでしたか?」

――「違う高校の仲間との出会いが本当に良かったです。今でも連絡を取りあい、互いに刺激を与えることができる最高の仲間です」と笑顔で語る。誰が欠けても駄目だと思えるほど、互いの信頼は厚い。仲間と忌憚なく意見を言えることで、物事を見る目も変わったそう。「今では、報道番組やドキュメンタリーが好きになりました。前の自分では考えられません（笑）」

「10ヵ月という長丁場に及ぶ事業ですが、どうでしたか?」

――「大変でした。その理由は、事後の活動では自分のペースで作業を進めたら周囲に迷惑をかけてしまうからです。普段の学校生活ではない緊張感で、いつも“ちゃんとしないと”と思って取り組み、気付けば責任感が芽生えるようになりました。」

カンボジアで出会った子どもたちと一緒に

「事業参加を通して、自分が成長したと感じる部分があれば教えてください」

――「自分を振り返ることができ、家族のありがたみを感じられるようになりました」と照れ臭そうに話す。「良い意味での“チャレンジ精神”も身に付きました。やらない後悔はしたくないし、どうせならきちんと挑戦しよう!と思えるようになりました」。事業の途中に、母親や友人から「栞、変わったね」と言われたことも。「カンボジアに行くことで、自分のダメな面にも向き合えるようになり、恵まれた環境にも気付けました」と自信に満ちた表情で語る。

「最後に、将来の夢を教えて下さい」

――中学校の時に「悩んでいる人の力になりたい」と思ったことやカンボジアでの経験から、高校3年で社会福祉を学ぼうと決意。「まず、大学で日本の福祉についてしっかり学び、社会福祉士の資格を取ることが直近の目標。将来は、さらに専門について学び、子どもや高齢者、障がいを持つ方を広い範囲でサポートしたいです!」と語るその瞳から、自分で未来を切り拓こうという決意が伝わってきた。

Salama Tonight（サラマ トゥナイト）

（5月10日　火曜日　札幌エルプラザ　3Fホール）

国際協力学生団体『結～yui』が主催する「Salama Tonight」（Salamatはフィリピノ語で“ありがとう”の意）が、札幌エルプラザで行われた。

『結～yui』は2008年に設立され、北海道大学の学生を中心に構成される団体で、現在は約30名が所属。設立当初はイベントでの収益金をもとに、フィリピンの貧困地域に家を建設するプロジェクトからスタートし、現在は週に1回の勉強会や、2015年からは学生に「国際協力」を広めることを目的に、札幌市内や近郊の高校で出前講座を行う活動を中心に展開。今回は同団体のメンバーがフィリピンとネパールを訪れた際の報告と、また両地域を支援するチャリティイベントとして開催された。

来場者が体を動かしてフィリピンクイズに参加

「自分たちで見て、感じたことを伝えたい」という思いから、企画から訪問先などもメンバー同士で決め、今年の3月にフィリピンを訪れた。首都マニラに着くと、中心街に聳え立つビル群を前に「なんでフィリピンに来たのか」と思うほど驚いたそう。一方、マニラ首都圏北部にあるケソン市パヤタス地区のごみ山周辺に住む人や子どもたちが生活している地域を訪問。「ごみ山」を通して、行政側、ごみ収集で生計を立てる人、崩れたごみの下敷きとなり身体に障がいを負った家族がいる人では見解が全く違うことを目の当たりにし、「何が正しいのかを見いだせなかった」など率直な思いを発表した。

学生の司会で盛り上がりを見せたビンゴ大会

また、北海道大学農学部の研究室が行うネパールでの技術指導のお手伝いを兼ねて、メンバーの数名が同国を訪れた。滞在中は孤児院や、人身売買にあった女性のカウンセリングを行っている施設を訪問。発表した女子学生の一人は、「自分とは全く違う道を歩んできた同じ年頃の女性と出会い、自分ができることは何かを考えた。今すぐ何かすることは難しくても、その施設の女性たちとの出会いを胸に、この事実を伝えていきたい」と声を詰まらせながら話す姿が印象的だった。

当日はアカペラ演奏や人気劇団によるオリジナル脚本の演劇、さらに、フィリピンやネパールのお土産が当たるビンゴ大会など内容も盛りだくさん。来場者も参加型で楽しめるイベントとなった。

JICA
草の根技術
協力事業

ウランバートル市の送配水改善プロジェクトを開始

（HIECC、札幌市水道局、札幌市水道サービス協会による連携協力事業）

HIECCでは、札幌市水道局や札幌市水道サービス協会と連携のもと、JICA草の根技術協力事業「地域活性化特別枠」を活用し、平成28年～30年の3年間にわたり、モンゴル国の「ウランバートル市送配水機能改善協力事業」を開始した。

井戸水を水源とするウランバートル市の水道は、貯水池と配水池に100m以上の標高差があり、近年の開発により水源量は増加したものの、水圧のバランスが悪く、標高の高い地域では出水不良や断水が頻発し、一方で低い地域では配水管等の破損・漏水事故などが課題となっている。

そこで、本プロジェクトでは、ウランバートル市の安定的な送配水システムの整備を目的として、ウランバートル市と同市の水道公社等を対象に、日モ双方での研修やワークショップを通じて効率的な送配水計画の策定に必要な人材を育成するとともに、最終目標として機能改善モデルプランを作成することとしている。

プロジェクトの実施にあたっては、札幌市水道局が技術指導を、札幌市水道サービス協会が水量・水圧に関するフィールド調査を、HIECCが事業経理や各種事務を担当する。各機関では、これまでにもJICAの課題別研修「上水道施設技術総合」コース等により海外水道技術者の育成に取り組んでいる。

第1回目の訪問として、本年2月15日～20日に札幌市水道局職員がウランバートル市を訪問し、キックオフセミナーと先行的な施設調査を実施した。17日のキックオフセミナーではモンゴル側からウランバートル市役所やウランバートル市上下水道公社ら約30名が参加のもと、札幌市水道局よりプロジェクトの概要や札幌水道についての紹介を行い、活発な意見交換の場となった。

平成27年度「パラグアイ青年交流団受入事業」

（1月28日～ 2月5日受入）

「北海道外国訪問団受入事業」は、本道からの南米への移住者子弟を北海道に迎え、「父祖の地・北海道」について認識を深めるとともに、道内の関係者との交流を通じて相互理解を促進し、北海道と移住国との親善交流に寄与することを目的に実施。平成27年度で19回目の開催となり、この度3年ぶりにパラグアイ共和国からの青年を受入れて実施した。

最も暑さの厳しい時期のパラグアイから北海道に来た6名（団長1名、団員5名）。全員が初めて経験する北海道の冬の寒さに、新千歳空港の玄関を出た瞬間に「寒いです」と思わず本音を漏らしていたが、幸運なことに滞在中は晴天に恵まれ、その後は季節の違いや疲れをほとんど感じさせないほど活発に行動していた。

巨大雪だるまを背景に全員でハイ・チーズ

日程の中には、北海道の産業や歴史、自然や文化などを体験できるプログラムが盛り込まれていたが、開拓当時の建物が展示されている北海道開拓の村では、「自分たちの祖先が北海道と南米を二度開拓したのを実感した」と語る団員も。一方、札幌ドームではプロのスポーツ選手が使用するスタジアムの雰囲気や最先端の技術を目の当たりにし、（株）アミノアップ化学では農産業の未来の可能性を感じられる視察となり、団員の中で一番印象に残る見学先となった。

交流を深めた八紘学園の教職員や生徒たちと

また、全員が最も楽しみにしていた「さっぽろ雪まつり」では、白雪が織りなす芸術的な大雪像に圧倒され、寒さを忘れ何枚も写真を撮っていた。また札幌テレビ塔から見た大通公園のきらびやかな夜景と雪景色にはすっかり心を奪われていたよう。冬の北海道の厳しさだけではなく、白銀の世界ならではの美しさも堪能できたようだった。

その他、南米圏交流団体の関係者や学校法人八紘学園北海道農業専門学校の教職員及び生徒との交流、親戚及び友人・知人宅でのホームステイでは真心からの歓迎を受け、道産子の温かさや優しさに触れる貴重な時間となった。

北海道を離れる頃には、お土産で膨れ上がったスーツケースのように、一人一人の心にはたくさんの思い出が詰まっていた。

さっぽろ留学生日記

新しいこともみんな楽しんで! 空手から始まった日本との出会い

サンギータ ウダーニー ラトナーヤカ さん
スリランカ民主社会主義共和国
（北海道大学大学院情報科学研究院 情報生物学研究室）

空手との出会い、日本語との出会い

国名のスリランカは「光り輝く島」という意味を持ち、その自然の豊かさからインド洋の真珠とも謳われる。サンギータさんは、中央高地の南西側に位置し、同国最大の都市コロンボから100キロほど離れたラトゥナプラ出身。学校のクラブに入り、10才から空手を習い始めた。スリランカ人の空手の先生が「始め」や「止め」と発する日本語に興味を持ち、「日本語を勉強したい！」という思いから、中学の授業で日本語を選択。その後、試験で優秀な成績を収め、高校1年生の時に、ホームステイをしながら斜里町の高校に1ヵ月間留学した経験を持つ。「空手の先生は空手の歴史も教えてくれ、いつも勉強のモチベーションをくれました。日本語の先生もスリランカ人で、今では、日本語を勉強する学生が私の時より増えていますよ」と当時の思い出も語ってくれた。

再び北海道へ

スリランカの高校では数学を専攻し、大学も理系の学部へ。大学4年の時に学んだ情報生物学で、「サラセミア（地中海性貧血症）」という病気の研究を知り、自分の研究テーマに決めた。「北海道には来たことがあるし、本州より緑が多い。涼しい場所も好きなので北海道大学を留学先に選びました」と。しかし、高校から大学まで日本語学習から離れていたので、6年間の空白が。「漢字も数字も全部忘れてしまい、最初は苦労しました。アパートでの一人暮らしでは勉強と自炊、掃除、洗濯を両立させるのが大変でした」と語る。今では、自活にもだいぶ慣れたそう。地下鉄の乗換も最初は大変だったが、今では「ＪＲへの乗換も問題ありません」と余裕の表情。

新しいことを学ぶ楽しさ

研究では「生物」を学ぶ必要もあるが、スリランカでは数学が専門だったため、北大に来てから生物の勉強をスタート。生活面の苦労はあっても、「勉強はあまり大変と思ったことはありません。新しいことは楽しんで勉強できます！」と弾ける笑顔で語るサンギータさん。「札幌にはスープカレーやみそラーメンなどおいしい食べ物がたくさん。びっくりドンキーも大好き！」と。日本のカレー屋で一番辛い番号を選んでも全く辛さを感じないのは流石。しかし、「スリランカに里帰りしたときに、カレーが辛すぎて全然食べられず驚きました（笑）。滞在２週間目で何とか食べられるようになりましたが、最後まで慣れませんでした」と苦笑い。

夏には修士課程の入学試験があるが、学びを楽しめるサンギータさんは、留学生活を充実させながら新たな道を切り拓き、将来、彼女の研究成果が故郷をさらに輝かせるのだろう。

お気に入りの恵庭の紅葉スポットで

在北海道外国公館・通商事務所等協議会「学校訪問事業」のご案内

在北海道外国公館・通商事務所等協議会では、北海道に所在する各国総領事／領事が、道内の中学校・高校に赴き、自国の情報や日本とのつながり、総領事館の業務などについてお話をする「学校訪問事業」を実施しています。

総領事／領事の派遣に係る移動交通費等の経費は原則不要ですので、学校関係者の皆さまはぜひ積極的にご活用ください。

「学校訪問事業」の概要

（1）対象学校等
北海道内公私立中学校及び高等学校（札幌市内は小学校も対象）

（2）講演内容（例）
①自国についての特徴的な情報　②総領事館／領事館の機能、および総領事／領事の仕事について
③学校側からのリクエストによる事項　④学校側（生徒）からの発表、報告など

（3）派遣可能公館
在札幌大韓民国総領事館、在札幌アメリカ合衆国総領事館、在札幌ロシア連邦総領事館、在札幌中華人民共和国総領事館、在札幌オーストラリア領事

（4）申込方法
申込書に必要事項を記入し、下記事務局へ直接ご提出下さい。（各総領事館／領事館には直接お申込みできませんのでご注意下さい）

申込先
在北海道外国公館・通商事務所等協議会 事務局（（公社）北海道国際交流・協力総合センター　交流・協力部内）
〒060-0003　札幌市中央区北３条西７丁目 道庁別館 12 階　TEL：011−221−7840　FAX：011−221−7845

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
ＨＩＥＣＣ／ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2016年6月10日
TEL. 011(221)7840　FAX. 011(221)7845　http://www.hiecc.or.jp
E-mail：intc@hiecc.or.jp（交流・協力部）
印　刷：岩橋印刷株式会社